渓流景観把握のための留意点について

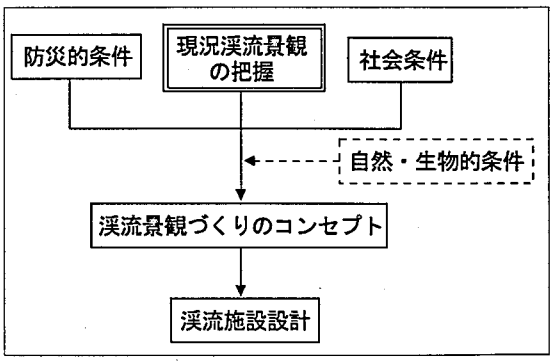
建設省越美山系砂防工事事務所　原　義文、松田　均
○山崎真嗣
㈱エイトコンサルタント　高橋尚城、河本達郎

1．はじめに

近年、自然景観（環境）に配慮した渓流施設等が各地で整備されつつあるが、違和感や無理の感じられるものが見られる。周囲の景観（環境）になじんだ無理のないもを作り出すためには、これまで以上に現況の渓流をよく観察し、その成り立ちや背景の理解を深めることが大切である。

今回は渓流景観（環境）把握のための留意点とこれに基づいた検討事例について報告する。

なお、ここでは計画していく上で重要と考えられる生物的条件には触れていない。今後の課題としたい。



2．渓流景観把握のための留意点

2.1 現地に立ち景観を詳しく観察する

①水　域

・流れの表情を把握し景観における流水の役割を理解する

景観を左右する流水の強弱（瀬、淵）、色等様々な状態から渓流の特性や現在の状況を把握し、渓流景観における役割を理解する。

・河原の礫の大きさや並び方を観察しその成因を考える

流れを形成している土砂、礫、岩の種類、大きさ、並び方、露頭状況を観察し、増水時の変化ある流れ等を想像する。

・水際の形状を詳しく観察する

水際は、水、石、草等の主要な景観要素が出会う接点であり、それぞれの形状や組合せを観察することにより、堆砂や侵食等、渓流の多様な状況を読みとる。

②周　辺

・植生の種類や生え方を把握する

草、木の種類、生え方、分布、密生度等を観察し、過去の増水による冠水頻度や河原の乾燥状況、水質等を把握する。

2.2 景観の成り立ちを理解する

・景観の基盤となっている地形、地質を理解する

地形、地質は背景等マクロ的部分から河床材料の生成まで景観に多くの影響を与えており、それらを把握した上で景観を理解する。

・過去の状況及び将来への変化過程を推測する

現在の景観から、短期・中期の植生の進入や成長、土砂の移動、澪筋の変化等を総合的に判断して、景観の成り立ちと時間ステージを把握する。

・上下流の展開の中から景観の位置づけを考える

渓流景観は各地点の状況を反映するだけではなく上下流の因果関係を反映しており、上下流との連続性や関連性に着目して、展開する景観の一場面として景観を理解する。

2.3 雰囲気を感じとる

・五感によりその場所の雰囲気を感じとる

頭で考えるのではなく、素直な感覚でその場全体の雰囲気を感じとる。

・人の利用を想定して雰囲気を想像する

実際にそこで人が水遊び、魚とり、散歩等利用しているところを想定して雰囲気を想像し、その場所の個性を見いだす。

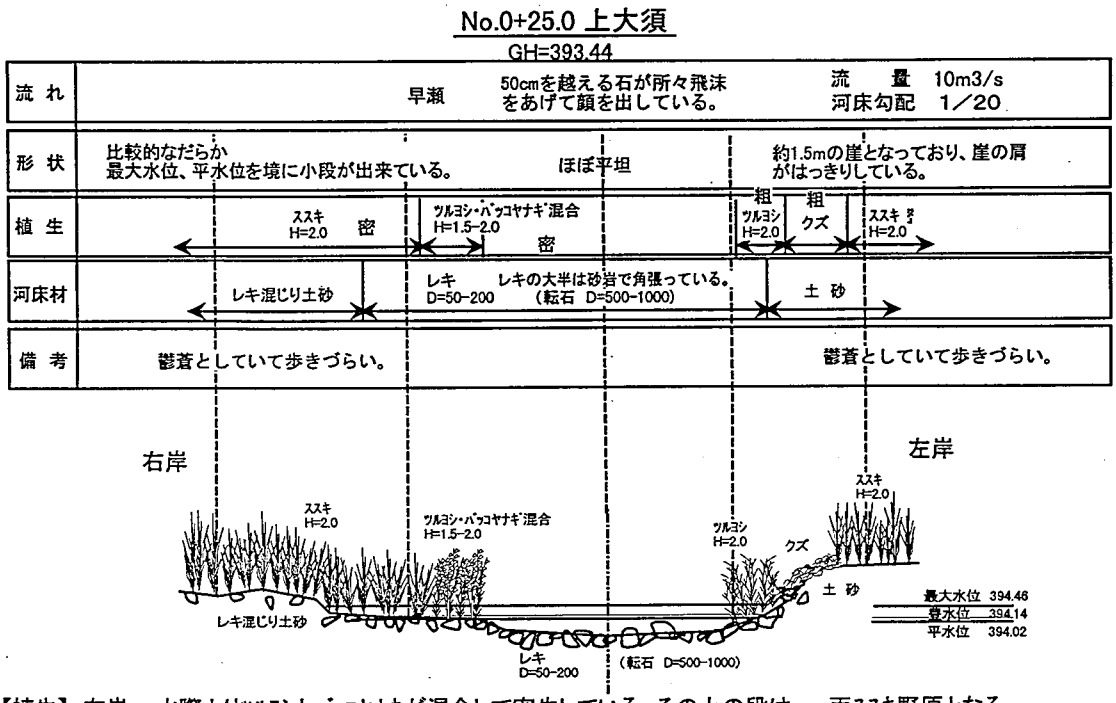
・他の人の感じ方を知る

他の人の感じ方を聞くことにより感じ方の多様性を理解する。

3. 景観把握の手法

現地を観察して得られた情報を景観情報図として整理する。

景観情報図〔横断図〕

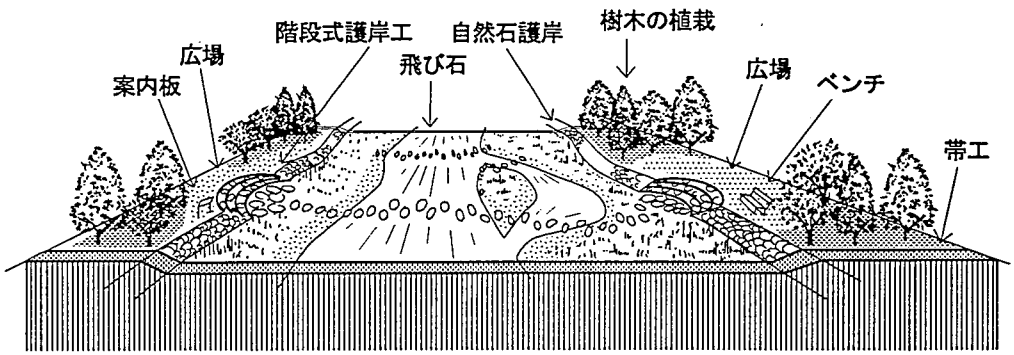
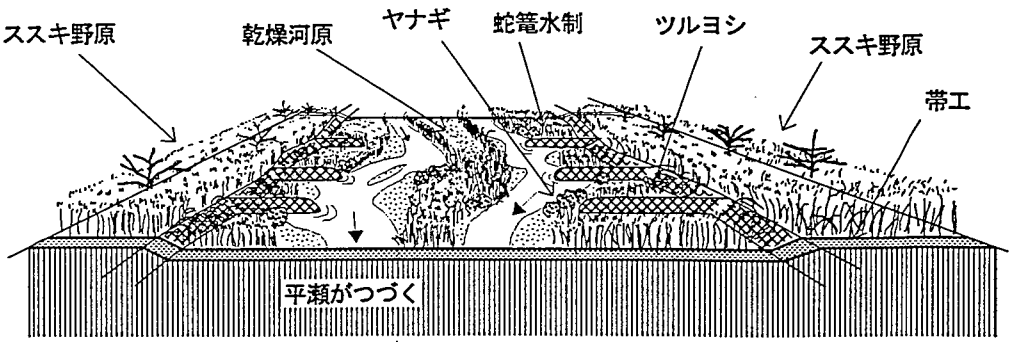


【植生】 右岸: 水際よりツルヨシとバッコヤナギが混合して密生している。その上の段は、一面ススキ野原となる。
左岸: 水際線より、狭い範囲でツルヨシが生育しており、崖面は上段からクズが垂れ下がっている。その上部はススキ野原となっている。

【河床材料】 左岸より右岸法尻までは、D=50～200mmのレキおよび転石により形成されている。大半が砂岩で角張っている。右岸の一段高い場所は、レキの混じった土砂となっている。一方、左岸の上部は土砂となっている。

4. 設計事例

これらの景観調査を通じて得られた知識を基に計画（案）を検討した。

	コンセプト	計画イメージ図
一般的な設計	・人々が渓流に親しめる空間を作る。 ・誰でも安全に楽しめる明るい空間を整備する。	
設計提案	・人々が渓流に親しめる空間を作る。 ・ススキの景観を生かし、訪れた人が逞しく自然とふれあう空間を整備する。